



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.53

帆樫成林

—はんしやうせいりん—

新潟市歴史博物館 博物館ニュース vol.53

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	地域をたのしむ「古町学」、始動！	P.2~3
特集2	むかしのくらし展「新潟のくらしと年中行事」	P.4
歴史さんぽ	黒鳥兵衛の墓!?「緒立八幡宮古墳」	P.5
おすすめの一冊	いいがた医者の夜話	P.5
特集3	収蔵品展「近世沼垂町」	P.6
館長日記	「北越秘説」の報告者	P.7
収蔵資料紹介	豆挿し具	P.7



「川・街・港 変わりゆく風景」関連イベント「2021年のみなとを写そう」にて乗船した港湾業務艇「あさひ」

各イベントは新型コロナウイルス感染症にともなう状況により中止または内容を変更する場合があります。

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
9/18(土) 14:00~15:00	みなとぴあ もめん部	博物館にある資料をつかひながら、布生産にまつわる手仕事を体験します。	大人向けの活動・部員が対象
9/19(日) 14:00~15:00	みなとぴあ子ども歴史クラブ 「100年前のいいがたをさがそう」	新潟は150年前に外国に開かれた港となり、その後街もどんどん変わりました。その痕跡を探しながら、街を散策してみましょう。	部員が対象
10/3(日) 14:00~15:30	西海岸公園で草花あそび	西海岸公園で身近な自然に触れながらむかしながらの草花をつかった遊びを楽しみます。(※雨天の場合は11月3日(水祝)に延期)	5歳から12歳の子ども・メールで申し込み必要・先着10人 ※集合場所などの詳細は返信メールでお知らせします

お申し込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申し込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

第18回むかしのくらし展 「新潟のくらしと年中行事」

日本の年中行事には、稲作などの農業の順調な進行や豊作を祈ることを起源とするものが多く、地域や家ごとに伝承されています。しかし、近年は生業と切り離されていることが多く、行事の意味を考える機会が少なくなりました。本展では、年中行事を通して新潟の1年のくらしを紹介することで、行事に込められた意味や人びとの祈りを再確認し、地域の文化を見つめ直す機会にしたいと思います。

会期 2021年9月17日(金)~11月14日(日)

休館日 毎週月曜日 ※9月20日(月)は開館

観覧料 無料 主催 新潟市歴史博物館

関連イベント

■むかしの稲の脱穀体験

日時:2021年9月26日(日) 14時~15時
会場:博物館敷地石庫前
※集合場所:本館1階たいけんのひろば
定員:10名
申し込み:必要、メールに氏名・住所・連絡先を記載の上9月19日までに申し込み
料金:無料

■年中行事カレンダーをつくってみよう

日時:2021年10月24日(日)、11月14日(日) 各回14時~15時
会場:本館1階たいけんのひろば
定員:各日10名
申し込み:必要、メールに氏名・住所・連絡先を記載の上、実施日3日前までに申し込み
料金:100円

次回企画展

「収蔵品・新収蔵品展」

資料の収集・保存は博物館の重要な事業です。今回の収蔵品展では、「近世沼垂町」というテーマで沼垂に関する収蔵資料を紹介します。新収蔵品展では、当該年度に新たに収集した資料を紹介します。

会期 2021年11月27日(土)~2022年1月30日(日)

休館日 毎週月曜日、12月21日(火)、12月27日(月)~2022年1月3日(月)、1月11日(火)
※1月10日(月)は開館

みなとぴあ便り

みなとぴあの見どころのひとつに、大型スクリーンを完備したミュージアムシアターがあります。

現在「新潟・水の記憶」、「あまのてぶり」、「黒鳥伝説」の3作品を上映しており、新潟の歴史や人物、民話などをわかりやすくご紹介しています。昨年から続くコロナ禍の中、ミュージアムシアターは感染防止対策として、座席は左右1席ずつ間隔をあげ、ゆったりとお座りいただけるようにリニューアルしました。



また本年6月からは、座席と入口のドアノブに抗ウイルス・抗菌施工(光触媒コーティング)を行い、感染防止対策を強化しました。ご来館の際は、ぜひミュージアムシアターで新潟の歴史に触れてみてください。
(企画普及課 山谷)

帆樫成林「はんしやうせいりん」第53号 発行日 令和3年9月15日
編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷/株式会社博進堂

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月4日曜日にお話します。

※内容が変更になる場合があります。ホームページでご確認の上、お申し込み下さい。

【時間】10:00~11:30

【会場】本館2階セミナー室

【申し込み】要事前申し込み(定員60名程度)

【資料代】100円

◆9月の講座:9月26日(日) ※申し込み開始:9月8日

近世沼垂町

講師:安宅俊介

◆10月の講座:10月24日(日) ※申し込み開始:10月6日

新潟と「新民歌」

講師:監野かおり

◆11月の講座:11月28日(日) ※申し込み開始:11月10日

地図でたどる信濃川

講師:森行人

◆12月の講座:12月26日(日) ※申し込み開始:8月4日

幕末新潟の絵師

講師:中村里那

お知らせ

■2021年12月27日~2022年1月3日まで
年末年始の休館となります。

旧小澤家住宅企画展

【展示】

■着物展「新潟花街の華の衣裳」

会期:9月17日(金)~10月3日(日)

■「新潟仏壇工芸」展

会期:10月16日(土)~11月7日(日)

■「新潟の郵便制度(仮)」

会期:11月13日(土)~2022年1月16日(日)

※当初予定していた「小澤家の婚礼料理」展は都合により開催できなくなりました。

開館時間:午前9時30分~午後5時

休館日:原則月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館料:一般200円 小中学生100円(土・日・祝日は無料)

所在:新潟市中央区上大川前通12番町2733(みなとぴあから約800m、徒歩12分)

TEL:025-222-0300

編集後記

今回の特集では、今年度から始動した「古町学」について取り上げました。最近では「古町」というと、「思い出の場所」として位置づけられることが多いように思います。しかし、現在の古町にもお店や景観、人など魅力的な部分はたくさんあります。この事業を通して、過去の良さだけでなく今の良さを様々な視点から発見してもらえたらうれしいです。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとぴあ

住所:〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10

Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130

E-mail: museum@nchm.jp URL: http://www.nchm.jp

【休館日】毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)

【開館時間】(4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00

2021年度

「みなとぴあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



古町を中心とした旧新潟町エリア（新潟県中央部）を学びの場とし、市民のみなさんと共に地域の歴史・文化・魅力を掘り起こす「古町学」が始まりました。

これは講座やワークショップ、展示など多彩なプログラムを実施していく五か年計画のプロジェクトです。今年度はその一年目として「古町学ことはじめ」と銘打ち、活動をスタートさせました。本特集はその報告第一弾です。

地域名を冠する「〇〇学」という名称は各地で見られ、定期的な刊行物の発行や講演会の開催などが行われています。「古町学」は、「古町」という非常に限定された地域名を使用しており、その事業内容が多岐にわたること、何より市民の方々に参加していただき、

共に地域について考え活動していく点に特徴があります。なお、本事業は文化庁の令和三年度文化芸術振興費補助金「地域と協働した博物館創造活動支援事業」に採択されました。

主催は「みなと新潟実行委員会」で、みなとびあが事務局をとめます。メンバーはこの他、日頃からこの地域を支える活動をされている新潟市中央区、新潟中心商店街協同組合／新潟古町まちづくり株式会社、古町花街の会、新潟商工会議所、路地連新潟の五団体です。事前会議では、それぞれの活動状況や「古町学」への期待、古町で活動する若者への注目、幅広い年齢層を対象とした事業の展開などが話し合われました。



江戸時代の旧新潟町エリア

「古町」なのか、「古町」以外に住む人々にとっては関係のないことなのか。もちろんそんなことはありません。まずはプロジェクトの意義をお伝えし多くの方に関心を持っていただくため、七月二十五日に「古町学」設立記念講演会を開催しました。会場は古町界隈の



「古町学」設立記念講演会

中核に位置するNEXT21の新潟市民プラザで、「古町学」にふさわしいスタートとなりました。

まずは事務局長小林隆幸（みなとびあ副館長）の趣旨と内容説明のあと、会長の伊東祐之（みなとびあ館長）と久保有朋氏（古町花街の会事務局・古町花街地区防災会事務局・旧齋藤家別邸学芸員）よりご講演いただきました。

伊東会長からは「古町学」の核となるなぜ「古町」なのかの話がありました。「地域」とは、他地域との関係性によって成り立ち、変容していくものです。江戸時代から他地域とのつながりにおいて経済的な結節点を担っている



講師の久保有朋氏

た旧新潟町エリアは、近代の大衆消費社会では古町通りがその中心となり、新潟といえば古町というイメージが定着しました。その後、交通・通信などの発達によって地域が拡大し、機能が分散していく中で、旧新潟町エリアの中心性は薄れてゆき、今では「古町地区」という呼称で一地域として捉えられるようになっていきます。このように、多くの地域とつながりその中で変容してきた歴史を持つ「古町」は、新たな形で地域間をつなぐ役割を担うことができるはずで、「古町」の埋もれている価値を見直し、そこからいまに即した新たな価値を創造し発信していくという「古町学」の展望が語

られました。

講演会の後半は、まさに古町に魅力を見出して移住し、古町花街について研究・発信している久保有朋氏に、その魅力、楽しみ方を教えていただきました。花街や芸妓のほか町並みや建築、食事などさまざまなアプローチにおける古町の魅力について具体的に話ししてくださいました。まちあるきや飲食店めぐりなど、すぐにでも古町へ出かけたくなった方が多かったのではないのでしょうか。

講演会ではアンケートを実施し、今後「古町学」でどのような活動をしたかアイデアを募集しました。多くの方が商店街やまちづくりに関心を寄せており、現在印象が薄まっているように見える「古町」に対して、むしろさまざまな想像を膨らませることができ、そのような可能性も感じられました。

「古町学」の記念すべき最初のワー



「古町子ども研究所」名刺交換会



何屋さんか調べる「研究員」たち



お店の方からお話を伺う



昔の地図をもって商店街あるき



お店でじっくりインタビュー調査

クショップは、小学生を対象にした「古町子ども研究所」でした。八月七日、午前は小学一・二年生、午後は三・六年生の「研究員」たちが、商店街の今と昔を調べるため、「現地調査」を行いました。

一・二年生は、古町通り五番町から七番町を歩きながらどんなお店があるのかを調べました。ショーウィンドーをのぞいたり、看板や掲示物を頼りに、何屋さんなのかをみんなで推理しました。それぞれ異なる商品を発見して、議論になる場面も見受けられました。そんなときはお店の方に尋ねながら調査を進めました。世界各地の民芸品を扱っているお店や、着物屋さん、喫茶店、本屋さん、パン屋さん、宝飾店など、実にさまざまなお店があり、なかには学校（専門学校）もあってびっくりした「研究員」もいました。三・六年生は、約五〇年前の住宅地図を見ながら、古町五番町から八番町までの間で、今も営業されているお店

を探しました。その後、グループに分かれてお店の歴史についてインタビュー調査を行いました。店名の由来や昔の外観、扱っている商品の変遷など、たくさんのお話を聞かせていただきました。ご協力くださった商店街のみなさま、誠にありがとうございます。

今年度実施する予定のワークショップは、ほかに「この人に聴く、古町の歴史・文化・魅力・今」として古町を軸に各方面で活躍する方々へのインタビューや「湊町再発見、信濃川から町の魅力を探る」としてウォーターシャトルからまちの景観を眺めてその歴史をたどり、魅力について話し合う企画などがあります。こちらは大人向けのワークショップです。地域を拠点にして活躍する仕事人たちへのコアな質問や、川からの視点でまちのどのような魅力を見出せるかなど、参加者の方々がそれぞれに感じ、考え、新たな魅力との出会いにワクワクしていただきたいと思います。

そして十月三十一日には「復活！古町芸妓の練り歩き 江戸時代の古町にぎわい再現」という一大イベントを開催します。古町芸妓の方々はもちろん一般にも参加者を募集して、江戸時代のファッションショーともいえる華やかな行列を再現します。当日はぜひ「古町」へ見物にご参集ください。

以上のプログラムの様子や、参加者たちが調べ考えた成果は、みなとびあホームページで随時、また年末頃にはパネル展やパンフレットなどでご報告する予定です。

これから「古町」を核にさまざまなプログラムを実施していきますので、ぜひ市民のみなさまにはこの「古町学」へのアンテナを張って、ときには一緒に企画・参加をしていただければうれしいです。「古町」をきっかけに地域の各地もまた見直され、連鎖しながら活性化していくことを期待しています。

（なかむら さとな 学芸員）

(会期二〇二二年九月十一日～十一月十四日)

年中行事とは、毎年特定の月日にくりかえして行われる行事のことで、月の満ち欠けや季節のうつろい、農作物の成育などにあわせて行われます。また、むかしは一年の仕事のほとんどが手作業でおこなわれ、作業の節目ごとに身体を休めたり、時にはぜいたくをしたりする日を大切にしました。このような普段とは異なる日を「ハレの日」といい、新潟では「モンビ物日」「アスピ(遊ぶ日)」などともいいました。

日本の年中行事の多くは、農耕や漁業といった人びとの生業の順調な進行や豊作を祈ることを起源とし、家ごとまたは地域ごとに様々な行事が行われます。今回のくらし展では、新潟のくらしを年中行事から紹介します。

れました。また、稲刈りが行われる秋には、八月から九月にかけて今年の豊作を祝う秋まつりが行われ、米の出荷作業がおわる十一月十六日には神様が田から去るのを送る「田の神さま(田の神上がり)」が行われました。そして、新年になり小正月(小年)といわれる一月十五日頃には、今年の豊作を祈るため、小さく切った餅やだんご、せんべいなどをシイやケヤキ、ダンゴの木などの枝にさして飾る「マユダマ飾り」が行われました。これは、稲に穂がたくさん実った様子を表現しており、飾ることを「サツキ」と、また片づけるこ

とを「稲刈り」という地域もあります。展示では、このような稲作の過程やその間行われた農耕儀礼を写真などで紹介します。

他にも、さまざまな年中行事が行われており、なかには現代と異なるかたちで行われている行事も多くあります。例えば、三月三日に女兒の成長を祈る「三月節句」は、現在では多くの家で雛人形を飾り、菱餅やあられ、ちらし寿司などを食べます。しかし、むかしは雛人形を飾る家はほとんどなく、菱餅をつくり仏壇や神棚に供えるのみでした。現在と比べると簡素に思えますが、多忙な仕事とつましい日々のくらしの中では特別な日でした。

また、神仏に関わる行事は宗派により違いがあります。盆を例にあげると、新潟市内で最も多い宗派である浄土真宗では、先祖の霊魂は現代に存在しないとの教えから、墓参り以外に特別なことは行いません。一方、禅宗・日蓮宗では、八月十三日に盆棚(精霊棚・オシヨウライ様)を飾ることで先祖の霊魂を迎え、十六日に片付けて川へ流すことで送り出します。西蒲区間瀬では、盆までに「精霊船(御精霊様)」をつくり、十六日にお供え物に乗せて海へ流す行事が行われています。



江南区木津のオシヨウライ様 (2018年撮影)

鈴木 彩也花



西蒲区稲島の田の神上がり (巻郷土資料館所蔵 1979年撮影)

このように、年中行事は地域や家、宗派、時期などにより様々な違いがあります。ご自身の家や地域で行われている行事と比較しながらご覧いただければと思います。また、年中行事の思い出などを自由に書き込める「ぼくわたしの地域の年中行事」というコーナーも設置しました。是非、他の来館者の方と年中行事の思い出を共有してみてください。

(すずき さやか 学芸員)

でしょうか。興味がそそられます。緒立八幡宮古墳は径30mほどの円墳です。4世紀代の古墳とされ、新潟県内では例が少ない葺石が施されている有力者の墓です。この被葬者は黒鳥兵衛にかかわる人物ではありませんが、その古墳の威容に黒鳥の伝説が仮託されたのでしょう。

なお、この地は緒立温泉でも有名です。温泉水は「霊水」と呼ばれ、神社の社務所前から湧き出しています。現地の解説板によると、「霊水」は黒鳥兵衛が塩漬埋葬された所より湧いているとされているとのこと。このあたり、パワースポットの予感がします。

小林 隆幸(こばやし たかゆき 副館長)



「寛治三年 越後古図」(当館蔵) 部分拡大



緒立八幡宮
右奥が古墳、左の低い屋根の建物が「霊水」湧き出し口。

歴史さんぽ

黒鳥兵衛の墓!?「緒立八幡宮古墳」

新潟市西区黒鳥

みなとびあのミュージアムシアターでは、「黒鳥伝説」を上映しています。CGや特殊メイクアップを駆使した迫力ある映像で、上映開始以来、その人気は衰えることがありません。蒲原平野を舞台に、大勢の手下を従えて悪事を働き、妖術をも使う黒鳥兵衛を、武将・源義綱が神のご加護とともに成敗します。切り取った黒鳥の首を埋めた場所が緒立八幡宮古墳の場所とされています。黒鳥兵衛は架空の人物ですが、源義綱は八幡太郎義家の弟で、実在した人物です。義家とともに「後三年の役」と呼ばれる戦に参戦しています。

文化12(1815)年の小田島允武が書いた『越後野志』に次のような記載があります。「黒鳥兵衛尉詮任墓 蒲原郡弥彦荘緒立村ニ在、墳上ニ八幡神祠ヲ建之ヲ鎮、祠廟沼中ニ在、洪水陸ニ溢ルレドモ、祠中水ヲ増事ナク、大旱ニモ沼水減ズル事ナシト云フ」。黒鳥の墓とされる緒立八幡宮古墳の地は洪水でも水に沈むことなく、干ばつでも周囲の水が干上がることなかったようです。言い伝えですが……。

今日に「越後古図」と称される謎の絵図が伝わっています。絵図の時期として、康平3(1060)年、寛治3(1089)年など平安時代の紀年が記されていますが、実際には江戸時代の創作と考えられています。その特徴は蒲原平野に当たる部分が内湾状に水没した状態になっていることです。なぜこのような図が創作されたのかは未だに不明です。話の設定では、絵図の時期となる寛治年間に黒鳥は越後にいました。この絵図は黒鳥の時代の越後の様子を描いたものと言い換えることができます。おもしろいのは、絵図を見ると黒鳥の墓がある「黒鳥」の地が水没しないで残っていることです。言い伝えを反映しているの

おすすめの1冊

にいがた医者の夜話

新潟に暮らし、出遇った人々、日々思ったことなどや体験したことなどが親しみやすい口調で語られています。新聞、俳句の会報誌、医師会報などに綴った随筆集です。「ねこさんという人」「油揚げと私」「もうひとりの河童医者」「心臓にツケ毛してウィーン」等々、目次を見るだけでも面白そうです。かつて日常だった新潟の様子や人々の人生が愛情を込めて描かれていて、若者の生の感覚が追体験でき、胸を打たれます。書き手の歯に衣着せぬ語り口調そのまま、伝わる文章のまっさらにお手本とすべき一冊でもあります。

著者の蒲原宏氏は大正十二年生まれの御年九十八歳。海軍軍医少尉を経て、医師として勤める一方、俳句は中田みずほ、高野素十に学び、新潟の俳句界を牽引してきました。さらに医学史、歴史、文化史も研究され、また、大正、昭和、平成、令和と変わりゆく新潟の町を見つけた体験を生かして、多くの講演、文筆活動をされています。今もなお、その好奇心は尽きることなく、仕事をこなし、まさにスーパーマンです。後進の灯として今後もご鞭撻いただきたいと願います。(大森 慎子 学芸員)



蒲原 宏 著
平成5(1993)年
新潟雪書房 発行

江戸時代、現在の信濃川河口の東側に、新発田藩領の湊町である沼垂町がありました。沼垂町には藩の年貢米をおさめる「御蔵」が置かれ、重要な拠点のひとつとして位置づけられていました。

は王瀬の北部へ、その後、大島というかつて信濃川河口にあった島へ、さらに蒲原へ、そして現在の長嶺あたりへと移転を繰り返しました。本展ではこうした町の移転(背景)や町域拡大に関わる絵図を紹介いたします。

当館では、この沼垂町に関わる「沼垂町役所文書」を所蔵しています。「沼垂町役所文書」は沼垂町と新潟町とのあいだで起こった争論関係の史料の他、町に関わる諸々の史料、さらに沼垂小学校の校長で郷土史家でもあった大橋順二氏が作図した絵図写等からなる史料群です。本史料群は総点数もそれほど多くはなく、また残存のしかたも偏りがあるため、ここから近世沼垂町の全容を知ることが難しいと言わざるを得ませんが、近世史料があまり残っていない沼垂町にあって、これまで基礎史料として活用されてきました。

また、沼垂町は対岸の新潟町と河口における湊の権利や島々の帰属をめぐって度々争いましたが、延宝九(一六八一)年の王瀬の堀割普請をめぐる訴訟以降、敗訴を重ねました。特に享保十二(一七二七)年の敗訴によって廻米船・領主用船以外の廻船の入津が禁じられ、沼垂町は商業港としての機能を大きく失いました。これによって、たとえば沼垂町商人が所有した、渡海する商業船は係留や船囲も新潟町側で行わなければなりません。さらに文政十一(一八二八)年、藩財政の悪化等の理由により大坂廻米が中止され、文政十三(一八三〇)年には浜での交易も否定されました。本展ではこうした沼垂町の湊の権利に関わる史料も紹介いたします。

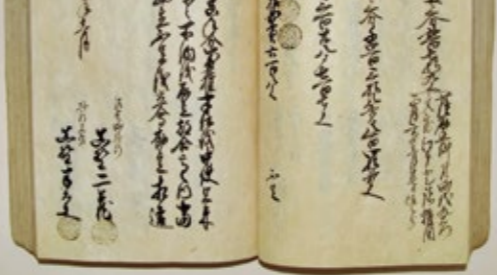
はじめ、町における暮らしに関わる史料を展示します。たとえば【写真】の「年々万雑内済払帳」という史料は、安永七(一七七八)年から文化十一(一八一四)年までの三十七年間にわたる沼垂町の町人用「万雑」の記録です。「万雑」は町の諸費を町人から徴収した金銭によってまかなった、町内会費のようなものであり、限られた期間・内容ではありますが、ここから町の財政状況(グラフ)をはじめ人口の変化などもうかがえます。

関わる史料を展示する予定です。本展が、河口にあったもう一つの湊町「沼垂町」の姿を、あらためて知る機会となれば幸いです。(あたか しゅんすけ 学芸員)

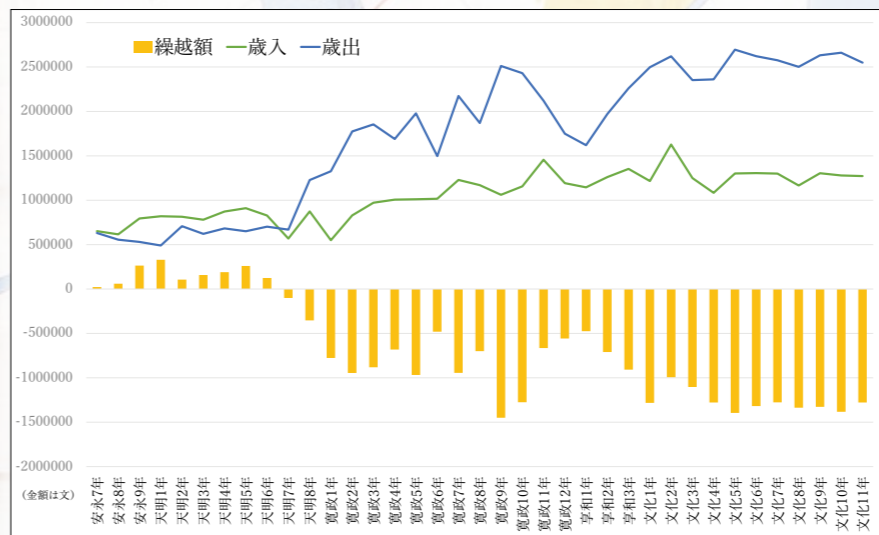
本展ではこの「沼垂町役所文書」を見直し、平成二十七年(二〇一五年)に開催した「沼垂」展から、さらに掘り下げた近世期の沼垂町の姿を紹介します。

沼垂町は江戸時代のはじめ頃は王瀬のあたりにあったといわれています。その後、河口の地形の変化に伴い、ます

命で御用を勤める御庭番ではなく、老中水野忠邦の命によって調査した者の報告であろうと述べています。私も水野が勘定奉行の命による探索、執筆と考えます。少し大沼氏に補足します。「廉書」には天保二年に修就が遠国御用を勤めたこととあります。その時の「日記書抜」には、「五月二日より十九日頃迄遠国御用二面引」と記載されています。ほかの御庭番が遠国御用を命じられたという記事もありです。自分が遠国御用を勤めたのなら、「廉書」や「日記書抜」に記載したはずで



【写真】年々万雑内済払帳(当館蔵)



【グラフ】沼垂町の財政状況

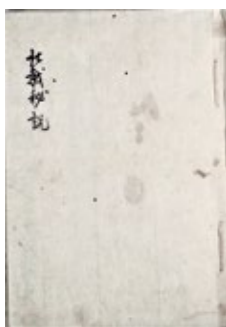
【背景】四度目沼垂町割王瀬山崩西川会河新濁川端堀口湊絵図(当館蔵)

「北越秘説」の報告者

『帆橋成林』四十八号で天保六(一八三五)年の唐物抜荷事件の発覚は竹島事件の余波と書きました。天保十一年の二回目の唐物抜荷事件は、初代新潟奉行川村修就の所蔵文書にあった天保十一年九月上申の「北越秘説」が原因だと考えています。これは別に述べましょう。

昭和九年刊行の『新潟市史』は、「北越秘説」を修就自身が探索した報告書としました。「北越秘説」が修就の筆跡で川村家の文書の中にあり、修就が御庭番として船売りに扮装して新潟を探索したという話があったからでしょう。以後、『新潟市史読本』や中野三義氏の著作など、これを継承している記述が多いようです。また、小松重雄氏は「幕末遠国奉行の日記」で、大沼淳氏から修就の「日記書抜」に天保十年の六月四日から八月九日の記事がないことを聞き、この時期に「北越秘説」を執筆していたと推測しています。

一方、大沼氏が書いたと思われる新潟市郷土資料館調査年報第六集の解説はこれを否定します。「御庭番内々遠国御用被仰付候廉書(以下「廉書」)では、遠国御用はすべて現役の御庭番が勤めるが、修就はすでに賄頭。この文書に「北越秘説」に相当する御用の記載がない。したがって、將軍の



「北越秘説」(当館蔵)

収蔵資料紹介

豆挿し具

大豆は各種の料理やきな粉・うち豆・納豆・味噌など様々な加工品に使われる食材です。農家では、様々な品種の豆を自家用に植えました。現在、当市は大豆、特に枝豆の産地として知られています。郊外に出ると豆木の並ぶ枝豆畑を見ることができ、かつては田の畦にも豆を植えました。

豆挿し具は、畦や畑の豆植えに使う道具です。本県の豆挿し具研究の先駆者上原甲子郎は、地域ごとに多様な形や呼び名があることを指摘し、豆挿し具を大別して六つの型式(細別九形式)に分類しています(上原一九六九「豆挿し具」『民具マンズリー』二巻五号)。写真上の資料は上原が杵型式と分類するもので、当館所蔵豆挿し具のほとんどがこのタイプです。上原によれば広く分布する型式で、豆さし杵や豆突き杵などと呼ばれました。

豆さし杵の使用法は、一人が杵で畦の土をたたいて穴をあけ、もう一人が二〜三粒の豆を穴に入れ、その上に藁灰か粉殻の燻炭を入れて穴をふさぎます(『黒埼町史』)。杵型式の豆挿し具を用いた作業は二人がかりで行い、植える量が少なくと小鎌を用いて一人で行う場合もあります。作業量に応じた豆挿し具の使い分けがあったようです。写真下の資料は上原分類の棒型式Bの形状に近



豆杵と豆挿し

いもので、スコップの柄を利用・加工したと思われる。民具の再利用例として興味深い資料です。畦の豆植えは五月の田植え前後に行われ、十月に入ると豆木ごと引き抜き、円形に積み重ねて「ニオ」にして乾燥させました。稲の収穫作業を終えると、干した豆を落とす作業をしました。畦で育てた豆は、味噌用であることが多かったようです。畦豆は水田の土地を利用し、毎年新しく築く土の畦を豆の連作に活かした技術です。豆挿し具は、水田耕作とその環境を活かした人々の生活の技術を現代に伝えてくれます。(森 行人 学芸員)